

# お茶うけ 第58話

## 使う人の立場での商品テスト

NHKテレビの「ためしてガッテン：肌にやさしい洗濯術、水の入れすぎが繊維を傷める！」(1998年11月25日)の放送を見ていましたら、「電気洗濯機に水を入れすぎると繊維を傷めることがあるので、全自動電気洗濯機は、最初に洗濯物の量を調べ、適量の水を注水してから洗い始める。そのために、水を入れる前に一旦洗濯槽を回転させて洗濯物の量を計る」と説明していました。

しかし、その番組の中で、洗濯のベテランである家庭の主婦が、シャツのエリなどの汚れを落とすためにあらかじめ手で部分洗いをした洗濯物は、かえって汚れが落ちきらず、しかも生地を傷めることになること知らされて驚く場面がありました。

私自身も単身赴任の間、自動洗濯機を使うときに、見よう見まねでシャツのエリの部分を手で部分洗いしていましたので、なぜそんなことになるのか不思議でした。

その番組の解説によれば、洗濯物が濡れると当然乾いた状態よりも重くなるので、全自動電気洗濯機は、その重さに惑わされて洗濯物の量を実際よりも多いと判断します。そこで適量以上の水を注水してしまい、洗いの段階で洗濯物が動きすぎて生地を傷めることになるのだそうです。

綺麗に洗い上げようとする利用者の努力が報われないのは困ったことだと思い、近くのスーパーの家庭電化製品の売り場で、最近の全自動電気洗濯機の機能を調べました。

各社とも、利用者の好みに応じた洗濯ができるように、幾つかの「全自動コース」の機能を用意し、それを選択するボタンを前面のパネルに並べています。その中に、「つけおきコース(えり、そでなどの落ちにくい汚れのお洗濯に)」というボタンがありました。どうやら、これはあらかじめ水餾水につけ置きしたり、部分洗いした洗濯物を、全自動電気洗濯機にかけたいときに使うもののようです。部分洗いして濡れた洗濯物も適量の水で洗うことができるようで安心しました。

全自動電気洗濯機の使い勝手について考えているうちに、花森安治のことを思い出しました。

『暮らしの手帖』の創刊当時の編集長で、日本の商品テストのパイオニアであった花森安治は、「利用者の立場で人間の手で実際に使ってみるとい商品テストは、メーカーの機械的な検査よりも、役に立つ結果が出せるのではないか」と言っていました。

製品テストについてはしろうとの『暮らしの手帖』の編集部が、メーカーよりも厳密なテストをしていることがあると気づいたのは、「どびん」をテストしたときでした。

『暮らしの手帖』が、あるメーカーのどびんについて、「このどびんは、湯が注ぎ口からうしろに向かってボトボトたれる」と書いたとき、九州の製造元が反論したので、『暮らしの手帖』の実験室で立会い実験を行いました。メーカーの設計者は、水道の蛇口から水をどびんに入れ、それを注いで、水が注ぎ口からたれないことを実証しました。一方編集部員は、日常使うときと同じように、どびんに熱い湯を入れて注ぎました。すると湯が注ぎ口からボトボトとたれました。熱い湯は冷たい水に比べ表面張力が小さいので、注ぎ口の縁を伝わりやすいのです。

また同誌は、スチームアイロンの蒸気がどういう形で、どの範囲に噴き出すかをテストしようと、テスト方法をまずメーカーに問い合わせましたが、そんなテストはしていないとの返事を受けました。そこで水に色をつけて実験してみましたが大失敗でした。いろいろ試行錯誤を繰り返して、蒸気が当たったところだけ色が変わるように、あらかじめ布に薬品処理をすることを考えつきました。噴き出した蒸気の跡を写した写真を雑誌に載せましたら、日本とアメリカのメーカーから逆に問い合わせがきたということです。

このようなテストをするに当たって、花森安治は、メーカーが苦労して開発した商品进行测试結果を公表することの意味と重大さを、よく理解していました。編集者たちには、完全主義の誤りのないテストを厳しく要求しました。また花森安治自身も「少しでも気掛かりなことがあると、夜も眠れず、小便に血がにじむことがある」と語るほど真剣でした。

『暮らしの手帖』の商品テストの記事に対して、メーカーからの強い反発もありましたが、このテストが日本の商品の品質に良い影響を与えました。次回に紹介します。

以上

### 参考文献：

『花森安治の仕事』 酒井 寛著 朝日新聞社刊 (1988年11月15日発行)

『花森安治の編集室』 唐澤 平吉著 晶文社刊 (1997年 9月30日発行)

